

高山の文化を高めた人々 43

日常の一瞬を捉えて見せてくれた 写真家 田中 一郎

北村 淳三

八年まで約四十年間にわたって市美術展の発展向上に尽力された。昭和四十一年に、写真クラブ「フォトビダ」を結成し、また市内外の写真クラブに招かれて、写真界の向上に努められた。

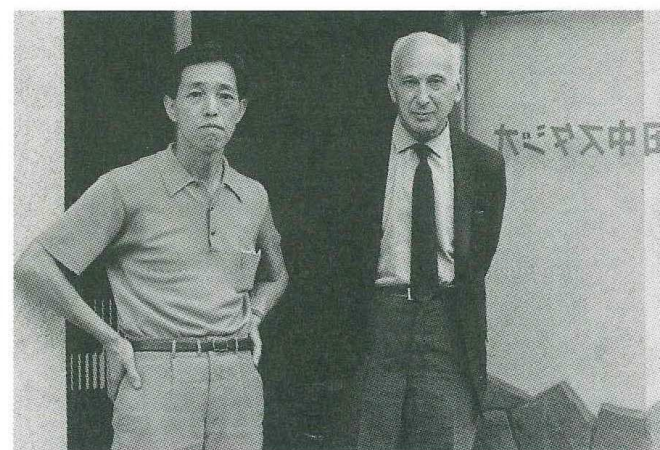
昭和四十九年「高山の人たち」―写っている人にあげる写真展―というユニークな写真展で二百余点を進呈し好評。平成四年、実行委員会の手で開かれた親友の故菅原廉緒氏（ホテルニューオータニ写真室主任で、本町にあった菅原写真館の館主）との二人展は市民に深い印象を与えた。

また、岐阜県美術展写真部審査員、運営委員、二科展写真部審査委員等も務められた。

田中氏の作風を慕って来高する若い人もよくあったが、著名作家に案内を請われる事もよくあった。特筆すべきは、アンドレ・ケルテス氏との出会ひであろう。氏は世界的な写真家で、昭和四十三年第一回目の「時代の目撃者」展のため来日されていた。日本の町を撮りたいという氏の願いに、田中氏と親交のあった写

真家濱谷浩氏が高山を紹介され、田中氏の案内で高山の撮影が行われた。氏を案内した三日間のスナップ写真が後年、『ケルテスの高山』と題して出版された。巨匠に寄り添いひたすら見つめた温かく深いまなざしが感じられるすてきな写真集となった。

田中氏の近所での事、ある家の傍らに高く伸びた雑草が一本取り残されている。わけを聞くと「芽が伸びかけた頃、田中さんが一心に撮っておられた。また撮られるかも知れないので抜かずに残してあ



アンドレ・ケルテス氏と

る」との事。この話に、まさに「高山の人」を感じる。ありふれたものに美を発見する人、それを粹と感じる人、理解し扶ける人。ふと見せる小さな心遣い。暮らしの中のさりげない装い。それは長年培われてきた高山人の気質・空気とも言えるべきものである。高山の文化を守り育ててきた根はこんなところにもあるのではないか。そんな高山の町の気配りが、温かくしつとりとした、また時にモダンともおしゃれとも感じられる作品を生み続けた田中一郎氏の土壌になつていたのであろう。

略歴

大正三年、大名田村七日町生まれ。

昭和十一年、東京武蔵野写真学校他写真研究所。同十二年帰高し写真館「田中スタジオ」を開業。同二十六年、東海三県営業写真協会写真コンクール文部大臣賞。同三十一年、三十四年、フォトアート誌の土門拳審査部門に応募、以来、土門氏の逝去まで終生師事。同五十二年、二科会会員推挙。平成七年、岐阜県芸術文化奨励賞。

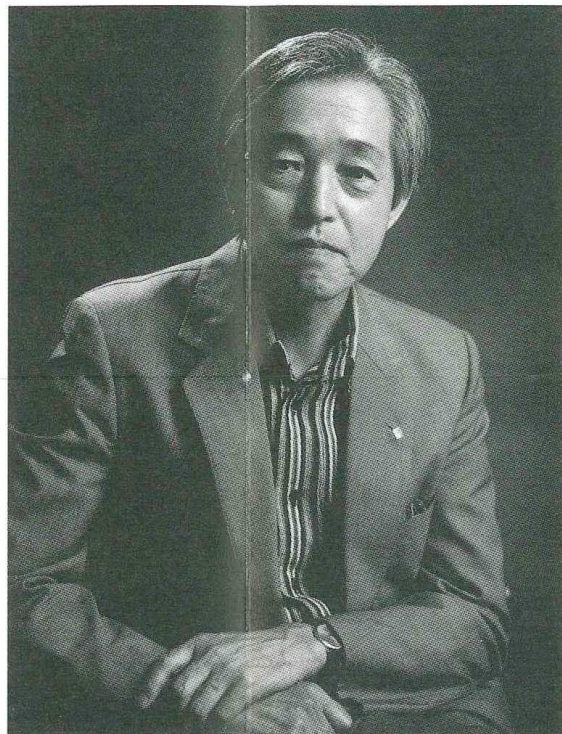
平成十年三月、東京都写真美術館に作品五十点収蔵。

写真集『昨日今日』『写真

日常』『ケルテスの高山』

『懐古高山』『郷愁の東京』

平成十九年四月逝去。



撮影 菅原廉緒

田中氏は、ごくありふれた風景の一隅や、生活の何気ない一瞬を深いまなざしで捉え続けた写真家であった。営業写真の傍らカメラ誌月例に応募。後に二科会写真部に所属し、作品を作り続けた。カメラを肩に歩き、シャッターを切る姿は町の風景のひとつまにもなっていた。

昭和三十一年、高山市美術展が開催されて以来毎年出品。審査制度が始まった第三回から写真部審査員（十一回から運営委員制度）を務め、平成